

論文

新人ソーシャルワーカーの困難を乗り越える過程 における対処行為の生成と変容

——『省察』に着目した縦断的な分析を通して——

孫 希叔¹⁾・黒木保博²⁾

要約：本研究は、新人生活相談員4名への縦断的なインタビューを通して、困難を乗り越えていく過程における対処行為の生成と変容を明らかにするものである。新人ソーシャルワーカーは、困難に直面すると、自分よりも多くの経験を持つ【他者の経験を媒介としたアプローチ】と【自己の経験を媒介としたアプローチ】を駆使して、実践の中での振り返りを行い、それによって意識的に生成された知を自らが直面している“今ここでの状況”に主体的に意味づけ、行動化することで、『問題状況の捉え方の変容』と『実践に取り組む姿勢の変容』を導き出し、自己の実践力の磨きと実践態度についての理解を深める【自信とやりがいの表れ】を実感していた。

キーワード：新人、困難、乗り越え、省察、専門的成長

目次

1. 研究の背景と目的
2. 研究方法
 - 2-1. 調査対象
 - 2-2. データ収集期間と収集方法
 - 2-3. データ分析方法
 - 2-4. 倫理的配慮
3. 調査の結果
 - 3-1. 抽出された概念とカテゴリーおよびストーリーライン
 - 3-2. 各概念の記述
4. 考察
 - 4-1. 困難を乗り越える過程における省察の特徴
 - 4-2. 省察を促す方法としての「対話」
5. 結論

1) 同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程

2) 同志社大学社会学部教授

*2018年3月1日受付、2018年3月1日掲載決定

1. 研究の背景と目的

毎年、4月になると実践現場には、多くの新卒職員が入職する。新卒職員を受け入れる側としては、職場適応を促し、一人前の職員として十分に働ける実践能力を身につけられるよう、様々な研修や指導を行っている。特に、特別養護老人ホーム（以下、特養）といった実践現場においては、専門的な知識や技術を単に適用するだけでなく、複雑な状況の中で直面する問題と向き合いつつ、その改善と解決に向けた適切な判断と実践を展開できる能力を持つ職員を早期に育成しなければならない状況にある。一方、新人として入職した職員にとっても、今まで学んできた内容をやっと活かせるようになったと、仕事への期待に満ち溢れ、自己の経験している多様な状況を理解しながら専門職としての土台をつくる時期として重要な意味をもつ。

ところが、実際の実践現場では、多くのソーシャルワーカーが日常の職務に追われ、日々の実践過程をじっくりと振り返る時間的余裕を持ってないのが現実である。すると、実践の方向性を見出していくために必要とされる判断において、自分の力量で何とかしようとするものの、理想に追いつくだけの能力が伴ってないため、状況への対応がずれたり、思いこみとなっていたりすることもある。このような現状では、「経験の積み重ね」がイコール「高い実践力をもっている」ことを意味するのではなく、かえって経験による思いこみや凝り固まった学びの認識が、ソーシャルワーカーの実践力向上を阻害する要因になることもある。特に、新人ソーシャルワーカーは、期待される役割を果たそうとするものの自らが初めて経験する実践の中での戸惑いや困難を客観的に理解することができず、高いストレスを抱えたまま、実践活動を継続できない状況に陥ってしまうこともある。先輩や同僚といった他者との「かかわり」と「つながり」を上手く築くことができず、否定的な自己認識を持ったことによって、自らの実践経験の意味を貧弱なものとし、さらには専門職としての成長する機会までを奪われてしまうのであれば、それを見過ごすことはできない。このような状況を考えると、新人ソーシャルワーカーが臨床において実践を積み上げていくこと、さらに、その中で必要とされる実践能力を形成していく過程を明らかにする必要性が見いだせる。

しかし、これまでの研究において、新人ソーシャルワーカーが直面している困難な状況に注目し、どのようなことを感じ、考え、吟味しているのか、またそれらを自らの関わりにどのように反映させているのかといった振り返りのプロセスについて、その詳細を明らかにした試みはまだなされていない。新人ソーシャルワーカーの専門職としての学びは、日常の業務の中でどのようにして行われているのか。また、彼・彼女らは、専門家としてどのようにして実践的知識をより論理的に構造化された知識に結び付けてい

くのか、経験を再構成するとはどのようなことなのか、ひいては、知識はどのようにして感情や活動に結び付けられていくのだろうかを検討することは、ソーシャルワーカーの実践能力向上のための支援方法を考える上で有用な示唆を得ることができる。

Schön (1983, 1987) は、複雑で不確定な状況の中で実践を展開する専門職として、省察的实践家 (reflective practitioner) を提示し、そのような専門家の実践における認識の特徴を、「省察 (reflection)⁽¹⁾」という思考様式として見いだしている。そして、実践的専門家は、実践において二つの省察を展開しているとし、実践の中での省察 (reflection-in-action) と実践についての省察 (reflection-on-action) を説明している。実践の中での省察 (reflection-in-action) は、状況と対話しながら瞬時に思考することによって、問題の本質と行動を明確にすることである。これに対して、実践についての省察 (reflection-on-action) は、事後に、実践の意味を問い直し解釈することによって、様々な気づきや学びを深めていることである。このようにどの時期に行われるかによって、その目的が異なるため、省察によって問題解決を行い、実践からの学びを確かなものにしていくためには、両方の省察が行われることが必要である。

近年、国内においても、省察の遂行をソーシャルワーカーにとって重要な実践能力の一つとみなし、ソーシャルワーカーの省察のあり様の解明や、その能力の形成に向けた研究の試みがなされている (南：2007, 日和：2015)。また、ソーシャルワーカーを省察的实践家として捉え、その成長における省察の重要性も注目されつつある (日和：2013, 南：2007, 坂本：2009)。このように省察がソーシャルワーク実践の領域において重要な概念として定着しつつある理由は、複雑で不確実な実践状況への取り組みとその経験から学ぶことの重要性を示しているからである。しかしながら、実践現場におけるソーシャルワーカーの省察のプロセスや構造に関する研究は、ほとんど見当たらないのが現状である。

そのため本研究では、新人ソーシャルワーカーを Schön の提唱する省察的实践家モデルの専門家として捉え、困難と直面した状況において問題解決に取り組み、その経験から学ぶ主体として考える。そして、省察的实践家の実践的な認識の特徴を示す概念である「省察」を手がかりに、新人ソーシャルワーカーが困難と向き合いそれを乗り越えていく際に、どのように行為しつつ考えているのか、新人ソーシャルワーカーの実践プロセスにおける省察のあり様を長期にわたるインタビューから明らかにすることを試みる。

なお、本研究に用いる用語として、「新人ソーシャルワーカー」は、特養に入職して初めて相談援助を遂行している者で、従事して3年未満の人」とし、「困難」は、日々の相談援助業務を遂行していく際、問題を解決するための手段や方法が思いつかず、ど

のように対処したらよいのか、不安や戸惑いを抱え、行き詰まりを感じている状況、とする。さらに、「乗り越える」は、新人ソーシャルワーカーが困難に対してある出来事をきっかけに解決することができ、自分の行為に自信をもって実践を遂行することができる状況、とする。

2. 研究方法

2-1. 調査対象

調査対象は、社会福祉士の資格を取得した直後、相談援助職として初めて入職した生活相談員を対象に依頼を行った。本研究では、特養に相談員として勤務している新人生活相談員4名（男性3名、女性1名、平均年齢23歳）の協力を得ることができた。

2-2. データ収集期間と収集方法

2011年6月から2013年4月までの約3年間、4~6か月に1回の頻度で計6のインタビューによるデータ収集を行った。内容は、入職後から現在まで、または前回のインタビューの終了後から現在までを振り返り、戸惑いや困難だったこと、それを乗り越えられた要因、その際どのような判断や行動を行ったか、それをどのように感じ考えたのか、実践の中での思考を詳細に語ってもらった。インタビュー時間は60分程度で依頼し、内容は本人の了解を得てICレコーダーに録音した。

2-3. データ分析方法

分析には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）（木下，2003）を用いた。これは、本研究で得られた継続的なエピソードは、すでにプロセス的な性格を持っており、コーディングを行うよりも、文脈を重視した分析を行う方が適切であると判断したためである。それに、困難を乗り越える過程を静的な状態ではなく、動的な変化をともなう過程として、当事者の視点から明らかにする上で適していると考えたためである。なお、M-GTAに基づいた本研究の分析テーマは、研究テーマと同じく、「困難を乗り越える過程における対処行為の生成と変容」と設定し、分析焦点者は「特養に勤務する新人ソーシャルワーカー」とした。

分析はM-GTAの手順に沿って、インタビューより得られたデータを基に、分析ワークシートを用いて概念生成を行い、複数の概念が生成された段階で、概念図にしていく作業を行った。概念間の関係から統廃合を繰り返しながら、カテゴリーを生成した。最終的に、概念とカテゴリーの関係について図式化した。それをもとに、現象を説明するストーリーライン（図1）を作成した。

なお、分析の妥当性を確保するにあたり、データ分析過程においては、M-GTA による研究経験をもつ複数の研究者に指導を受けながら検討した。さらに、本研究の調査対象者に対し、生成した概念とカテゴリーを用いて分析テーマの現象に対する説明を行い、調査対象者の思いに合致しているかを確認することにより、妥当性を確保した。

2-4. 倫理的配慮

本調査は、日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に基づき研究を進めた。まず、機縁法により調査対象者を募り、協力の意思のある調査対象者から直接連絡を受けることで対象の選定を行った。最終的な調査対象者となった新人ソーシャルワーカーに対し、研究の目的と方法、依頼する内容、研究参加の取り消しの自由、調査対象者への倫理的配慮について記載した依頼書を提示し、説明を行い、承諾を得た。

3. 調査の結果

3-1. 抽出された概念とカテゴリーおよびストーリーライン

3-1 (a) 抽出された概念とカテゴリー

データに基づいて分析を行った結果、困難を乗り越える過程において、新人ソーシャルワーカーが行っている対処行為の生成と変容を構成する概念としては、32の概念が生成され、13のサブカテゴリー、4つのカテゴリーと3つのコアカテゴリーが生成された(表1)。

以下、生成された概念をもとに、新人ソーシャルワーカーが困難を乗り越える過程における対処行為の生成と変容過程(ストーリーライン)、および各概念の内容を示す。なお、本稿では、概念は〈 〉、サブカテゴリーは《 》、カテゴリーは【 】, コアカテゴリーは『 』で記した。また、調査対象者の発言を「 」で示し、わかりにくい部分は研究者が補足し()で表記した。なお、各カテゴリーの構成や流れを説明したモデル図は、図1に示すとおりである。

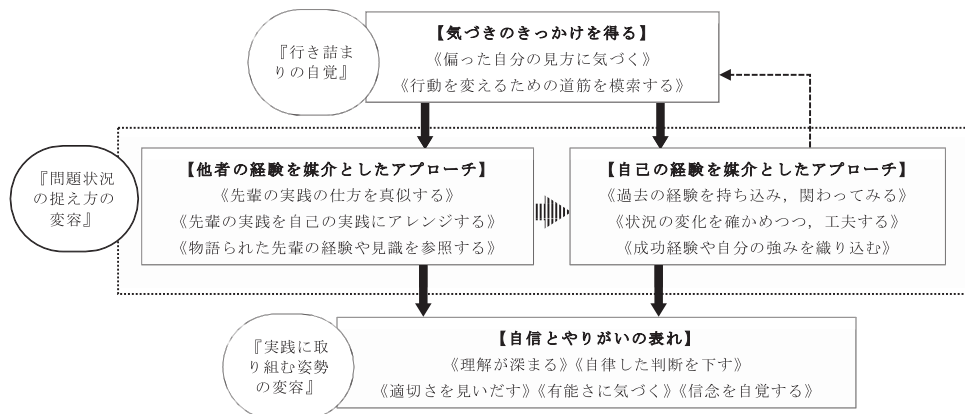
『行き詰まりの自覚』に至った新人ソーシャルワーカーは、実践の中での省察によって『問題状況の捉え方の変容』とそれによる『実践に取り組む姿勢の変容』を経験していた。

3-1 (b) ストーリーライン

『行き詰まりの自覚』のきっかけとなるカテゴリーは、【気づきのきっかけを得る】であった。新人ソーシャルワーカーは、《偏った自分の見方に気づく》ことから《行動を変えるための道筋を模索する》ことを試みていた。そのために、《先輩の実践の仕方

表1 困難を乗り越える過程における対処行為の生成と変容に関連する概念とカテゴリー

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	概念	
『行き詰まりの自覚』	【気づきのきっかけを得る】	《偏った自分の見方に気づく》	〈気がかりなことを流せない〉 〈自分の思いと異なる反応に戸惑う〉	
		《行動を変えるための道筋を模索する》	〈視点を変え、予測する〉 〈自分の中のズレを修正する〉	
		《先輩の実践の仕方を真似する》	〈先輩から言われたとおりにやる〉 〈モデルにしたい人の行動を真似する〉 〈他職種の見方を手がかりにする〉	
		《先輩の実践を自己の実践にアレンジする》	〈先輩の実践を見聞きする〉 〈先輩の実践をみせてもらう〉 〈先輩の考えを受けとめる〉	
『問題状況の捉え方の変容』	【他者の経験を媒介としたアプローチ】	《物語られた先輩の経験や見識を参照する》	〈先輩同士の会話から、情報を得る〉 〈物語られた先輩の見識を取り入れる〉	
		【自己の経験を媒介としたアプローチ】	《過去の経験を持ち込み、関わってみる》	〈過去の経験と重ね合わせる〉 〈類似した場面を想起し、比較する〉
			《状況の変化を確かめつつ、工夫する》	〈かかわり方を組み合わせて、アレンジする〉 〈出来事の成り行きを細かく分析し、吟味する〉
	《成功経験や自分の強みを織り込む》		〈成功経験を今に活かす〉 〈自分の強みを活かす〉	
	『実践に取り組む姿勢の変容』	【自信とやりがいの表れ】	《理解が深まる》	〈実践に対する理解が深まる〉 〈知識と実践が結びつく〉
			《自律した判断を下す》	〈客観的な視点を持つ〉 〈自ら問題を見つけ出す〉 〈自分の軸を持つ〉
《適切さを見いだす》			〈手ごたえを感じる〉 〈仲間から認められる〉 〈信頼の深まり〉	
《有能さに気づく》			〈効力感〉 〈自信の深まり〉 〈実践の発展〉	
《信念を自覚する》			〈積み重なったこつ〉 〈実践に対する基本的な構え〉 〈専門職としての意識の芽生え〉	



《 》 サブカテゴリー、【 】 カテゴリー、『 』 コアカテゴリーを表す

||||| 関係の方向 ➔ 変化の方向 影響の方向

図1 新人ソーシャルワーカーの困難を乗り越える過程における対処行為の生成と変容プロセス

真似する》ことや《先輩の実践を自己の実践にアレンジする》こと、《物語られた先輩の経験や見識を参照する》ことを手がかりに、自らの実践の振り返りと再構成を試みていた。このように、自分より豊富な経験を持つ先輩の実践あるいはその語りを、自分自身が抱えている状況を乗り越えるための手がかりとして使う実践的行為を、【他者の経験を媒介としたアプローチ】というカテゴリーに位置づけた。

このように【他者の経験を媒介としたアプローチ】による試みとその中での振り返りを繰り返す一方、自分自身が有する《過去の経験を持ち込み、関わってみる》ことや《状況の変化を確かめつつ、工夫する》さらには《成功経験や自分の強みを織り込む》といった行為をとおして、自らを取り巻く困難な状況の改善も試みていた。これは、今までの試みを積み重ねてきた中で持ち得た知識を、自分自身が直面している今の状況に照らし合わせることで、より良い方向への改善を図るための手がかりとして活用することであり、ここでは【自己の経験を媒介としたアプローチ】というカテゴリーに位置づけた。さらに、これらの【他者の経験を媒介としたアプローチ】と【自己の経験を媒介としたアプローチ】によって促された振り返りと再構成を通して『問題状況の捉え方の変容』が導き出されたと解釈した。

こうして、『問題状況の捉え方の変容』を繰り返していくにつれ、新人ソーシャルワーカーは、自分が直面している状況に対する《理解が深まる》ことを実感し、それを基に《自律した判断を下す》ようになっていた。そして、自らの実践への取り組み方に対する《適切さを見いだす》中で、自分自身の《有能さに気づく》ようになり、専門職としての《信念を自覚する》ことに至っていた。このように、新人ソーシャルワーカーが『行き詰まりの自覚』を持ちつつも、その中で自分自身への振り返りを積み重ねることによって、さらなる実践力を体得し、援助専門職に対する動機づけを高め、自らを肯定的に捉えている状態を、【自信とやりがいの表れ】というカテゴリーに位置づけ、新人ソーシャルワーカーは、『行き詰まりの自覚』というネガティブな経験に直面しながらも、自分自身への振り返りと状況の改善のための試みを繰り返し、その結果『実践に取り組む姿勢の変容』が行われていると解釈した。

3-2. 各概念の記述

3-2 (a) 『行き詰まりの自覚』

新人ソーシャルワーカーは、入職し担当部署に配属されて、業務を継続しているなかで、様々な出来事を通して《偏った自分の見方に気づく》ことが促され、自らの《行動を変えるための道筋を模索する》中で【気づきのきっかけを得る】ようになっていた。

① 【気づきのきっかけを得る】

【気づきのきっかけを得る】とは、自分では当然であったものの見方や考え方が、周

困と違うためにギャップが起こっていることを知ることによって、偏った自分の見方を変えようとしている状態である。これは《偏った自分の見方に気づく》《行動を変えるための道筋を立てる》の二つのカテゴリーから構成された。

《偏った自分の見方に気づく》とは、実践場面において、自らのものの見方や考え方と反対の意見を受け入れることが出来ず、自分と反対意見を持っている人と対立するだけでなく対応できる幅が狭くなり、自らの実践に行き詰まりを自覚している状態である。これは、〈気がかりなことを流せない〉〈自分の思いと異なる反応に戸惑う〉の二つの概念から生成された。

《行動を変えるための道筋を模索する》とは、自分の偏った見方により、自分も相手にいやな思いをさせている状況への気づきによって、たとえ自分の考えと違ってもその人はどうしてそう考えるのかを学び取る姿勢を持ち、問題状況に柔軟に対応するように心がけている状態である。これは、〈視点を変え、予測する〉〈自分の中のズレを修正する〉の二つの概念から生成された。

慣れない業務も多いし、先輩に相談したくても、先輩も忙しくてなかなか相談できないので大変…（中略）業務にも人それぞれのやり方があるって、教えてもらったことをやっても、他の先輩におかしいと怒られたり。正直に言えば、納得のいかないことも多いんで。どうしていいのかもわかんないし、逃げたい気持ちばかりが…。(Dさん)

何かはじめにやる時は、いろいろと説明してもらうんですけど。まあ、大体最初はなんとなくですけど、とりあえずは、そのままやってみて…。自分でやってみると、やっぱりそうなんだ！と納得するものと、あれ？と疑問に思うこともあるんです。(Cさん)

もっともストレスだと言われるのが家族クレームの対応なんです。まあ、受容しなきゃと言われてしまえば、仕方ないとは思うけど。それも積もりに積もると、かなりの重圧に。ストレスから体調を崩してしまうと、『何のために働いてるんだろう、何のために生きてるのだろうか』って思うと涙が止まらなくなりました。(Aさん)

ひとりだちしていても、やったことのない仕事ばかりで、時には仕事が終わった後も走りまわってます。先輩に聞いたりしてるけど、日中は私を入れて2人しかいないので、先輩に迷惑をかけてしまうんで…。時間に追われて、先輩の顔色ばかりを気にして、まったく入所者を見ていない自分が嫌なんです。課長も声をかけてくれたりはするんですけど、自分（声をかけてくれた課長）のことで手一杯なんで。相談するのでもできてないんで…。(Bさん)

（ある出来事に）振り回されていて…（中略）周りに巻き込まれるのが嫌で、スルーして。自分が我慢すればいい、他人の心配なんかより、自分の事が大切というか、他人のことまで心配している暇はないと思って…。でも、このままだとどうなってしまうのだろうかと思

なるっていうか、正直あるんで…。(Cさん)

3-2 (b) 『問題状況の捉え方の変容』

自らの実践の中で、【気づきのきっかけを得る】ようになった新人ソーシャルワーカーは、戸惑いや行き詰まりをそのままにせず、自らの実践を振り返りながらその状況の改善に向けた行為を駆使し、解決への道筋立てを試みていた。

その際、新人ソーシャルワーカーは、状況の改善に向けた手立てとして【他者の経験を媒介としたアプローチ】と【自己の経験を媒介としたアプローチ】という二つの手がかりを用いて、状況の改善に向けた判断や対処を行っていた。

① 【他者の経験を媒介としたアプローチ】

【他者の経験を媒介としたアプローチ】とは、自分よりも多くの経験を持つ同僚や先輩の行動、あるいはその語りを、自分自身の関係している状況に取り入れるための手がかりとして用いるアプローチである。これは、《先輩の実践の仕方を真似する》《先輩の実践を自己の実践にアレンジする》《物語られた先輩の経験や見識を参照する》の三つの上位概念から生成された。

《先輩の実践の仕方を真似する》とは、今、自分に起こっていることに、どうする必要があるのかの具体策を先輩から教われたことに基づきながら、先輩の行動パターンを真似し、身をもって体験している状態である。これは〈先輩から言われたとおりにやる〉〈モデルにしたい人の行動を真似する〉〈他職種の見方を手がかりにする〉の三つの概念から生成された。自分自身の知識不足に情けない思いを抱きつつ「どうやったらいいのかが全然分からない」状態に陥っていた本調査の対象者は、〈先輩から言われたとおりにやる〉ことで、求められる対処法を少しずつ自分のものにしていった。また、それまでに経験したことのない状況においても、〈モデルにしたい人の行動を真似する〉あるいは〈他職種の見方を手がかりにする〉ことで、「慌てることなく、対処」していた。中には、先輩の指示に従うことからスタートしても、そのうち「この場面で先輩ならどう動くか」と、先輩の行動や考えをイメージするようになったと語る調査対象者もいた。

先輩から教えてもらったことは、一通りやってみてます。こんな時はこうすればいいので…と言われて。なんか、どうすればうまくいくのかのコツというかハウツーみたいなものを話してくれるので。(Aさん)

先輩のようになりたいと思って…。先輩が(家族対応を)電話で話しているのを見るときは、しゃべり方だったり声の出し方、話す内容だったり、話す順番とかもメモしておいて…。(Cさん)

自分には苦手というか、相性が合わないというか、いつも不機嫌な顔をしている入居者がいるんですが、看護師とはとてもにこにこしていて、その看護師はどうやってるんだろうとみていて、同じく話しかけてみたりして…。(Dさん)

《先輩の実践を自己の実践にアレンジする》とは、先輩からいろいろな方法を学んでいたソーシャルワーカーが、「見たことのある先輩の行動」を参照しながら、「私もあんな風になりたい」と、自分なりのやり方を主体的に見出している状態である。これは、〈先輩の実践を見聞きする〉〈先輩の実践をみせてもらう〉〈先輩の考えを受けとめる〉の三つの概念から生成された。本調査の対象者は、「どうすればうまくいこうかが分からず、落ち込んでいる」時、先輩の行動や言動を注意深く観察し、ある手順や観察ポイントなどを見つけることで、「デキル人はこう考えて動くんだ」と前向きな気持ちになり、自己の直面している問題状況に取り入れるなどの能動的な解決を試みていた。時には、利用者への声のかけ方などといった細かい内容について、聞くだけではなく実際どのように行なうのか〈先輩の実践を見せてもらう〉ことで、対象や状況に合わせてどのように考え、行動すればよいかを模索していた。さらに、目の前のある状況と関わり、どのようなことを予測し、どのように対応するかについて、「やり方だけではなく、その意味や目的も細かく教えてもらう」ことにも心がけ、失敗を恐れることなく堂々とした立ち居振る舞いができるようになったと語る人もいた。

(先輩を)黙ってみてました。よくみていくと、学べることがたくさんあります。1から10まで全部のやり方じゃなくても、あの先輩のこういう所、あの人のこんな時のやり方っていう感じで、いいなと思う部分はしっかり観察して、なるほどと、自分に合ったものは取り入れて、自分オリジナルのやり方ができてきてる感じ…(Aさん)

マニュアルを見ても(家族への説明を)どうしたらいいか分からなかったの、先輩に相談したら、先輩の相談場面に同席させてくれたことがあります。(中略)言葉で自分の気持ちを全部伝えるんじゃなくて、態度だったり、表情だったりとかで表すんだなと思いました。それを自分のものにしようと思って…(Bさん)

先輩の動きをみて、やってることのレベルが高すぎて、到底、自分に真似できる気がしなかったんで。(中略)でも、仕方がないので、先輩に何を意識してああいう言い方をされたのかを聞いて、先輩の考え方をしっかり聞いて、後は自分で考えてやり方を作っていこうと思って…(Dさん)

《物語られた先輩の経験や見識を参照する》とは、ミーティングや休憩室などの場面において、先輩職員同士の会話や意見のやりとりを見聞きしたり、問題状況にどう対処していたのかを聞いたりして、そこで知り得た「ものの見方」を、自己の問題解決に活かしている状態である。これは、〈先輩同士の会話から、情報を得る〉〈物語られた先輩

の見識を取り入れる)の二つの概念から生成された。本調査の対象者は、先輩の実践に関わる経験の語りを聞いたり、休憩時間に聞く雑談や普段の何気ない会話の中から「参考になるポイントを発見」し、それを意図的に自己の状況に置き換えて捉え直していた。中には、「業務に直結しない話題でも、後に参考になるものが多々ある」と思い、「そういう会話を大事にしよう」と思っているソーシャルワーカーもいた。その際、周りと自分の知識量や判断力の違いを感じたり、自分の理解に不確かさを感じると、「今更聞けない」という葛藤を抱えながらも、実践の方法や留意点について「先輩がどのような判断によって行動しているのかを聞き取る」ことを繰り返し、自分の理解への確認を得ていた。

先輩たちの経験談を聞いてると、これだ!とか、もしかして!?!とか、ああ、そうだったのか!と自分に役に立ちそうなことを発見することがあるんで。時には、そのふとした発見で、仕事をもっとはかどるようになっていたりもするので。(Aさん)

休憩室で、先輩同士がものまねを交えながら話をしているのをよく見かけるんですが、…(中略)…先輩は、何に悩んでいて、どのようなことに力を入れるのか、そんなことをふんだんに聞けるんで…(中略)…自分でもできることをやってみる手本としては十分に役立ちます。もしも上手くいなくても、次の解決策を探るといいだけなんです。(Bさん)

もう、下に後輩が入っていて、今さら聞けないことが多いんで…。会議では、聞くいろんな人の発言には、自分でやってみたくなるようなものがたくさんあります。まあ、中には「こうなっちゃダメだな」と思う先輩もいるんで…。自分がないものというか全く新しい仕事のやり方を見つける時は、嬉しくなるんです。(Dさん)

②【自己の経験を媒介としたアプローチ】

【自己の経験を媒介としたアプローチ】とは、それまでの自己の経験の積み重ねから持ち得た知識を自分自身が抱えている状況に働きかけるための手がかりとして用いるアプローチである。これは、《過去の経験を持ち込み、関わってみる》《状況の変化を確かめつつ、工夫する》《成功経験や自分の強みを織り込む》の三つのサブカテゴリーから生成された。

《過去の経験を持ち込み、関わってみる》とは、今直面している行き詰った状況への対応において、過去の類似する経験から、何らかの発見をし、あるまとまった考え方や意味づけ、行動のプロセスといった手がかりを得て、困難を感じている今の状況への対処を行っている状態である。これは、〈過去の経験と重ね合わせる〉〈類似した場面を想起し、比較する〉の二つの概念から生成された。本調査の対象者は、日々のさまざまな経験を得るにしたがって、『行き詰まりの自覚』をしていた時の状況と今ここでの状況とを比較し、その差違から状況への対処において何が必要なのかを見出していた。そし

て、今ここでの状況が過去に自分が経験した状況と似ていることを認識し、状況への対処において何が必要なのかを見出すなかで、状況の改善に至る予兆となるサインを見逃さないように注意深く観察し、対処しようと心がけていた。

仕事の中身がぜんぜん違っていても、前に経験したことと似ているものがあったりするんで、その時はまったくのゼロからスタートではなくて、前の経験を活かせるので…。(Bさん)

「この部分はあの時と同じだから…」とか「ここまでなら何とかやれそうだな」と考えると、緊張したり不安を感じることなく対応できます。そのうち、「これは後どれほどであれば」という見通しを持つようにもなったりします。必要な時にすぐに思い出せるように、その時に学んだことをメモとかで残しておいたりして。(Aさん)

《状況の変化を確かめつつ、工夫する》とは、行き詰まりに気づき、改善の必要性を認識したソーシャルワーカーが、自己の行為による状況の変化を確かめながら、自分自身のかかわり方を導き出している状態である。これは、〈かかわり方を組み合わせて、アレンジする〉〈出来事の成り行きを細かく分析し、吟味する〉の二つの概念から生成された。本調査の対象者は、気がかりとなっていた状況を変えようと働きかけながら、その中で新たな理解や関わり感触を手がかりにして、状況を改善させるための枠組みを考えていた。一方で、「これでよいのだろうか」と「自己の判断に対する迷いや不確かさ」を感じていた。そのため一旦、直面している状況から離れて、状況の判断に必要な情報を整理して関連づけたり、新たに集めたりして、再度その状況の見直しを図るための〈出来事の成り行きを細かく分析し、吟味する〉という行為をとおして、状況の変化とその理由を捉えていこうとしていた。

この仕事って、自分が望むか、望まないかに関係なく、違う出来事が次々と起こるんです。思う通りに進まないもんで。すると、以前にうまくできたことをそのままやってるだけでは壁にぶつかってしまうというか、自信もって説明できなくなるので。なので、「こういう時にはこれが、これとこれ」というような工夫をして、具体的な対応を取るようにしています。(Bさん)

いろいろとかかわっていく中で、新たに気づいたことが出てくると、これまでのやり方を繰り返してもいいのか、今までのやり方に一ひねりを入れないといけないのかを考えてます。どう判断するかを決めるために必要な情報を集めたり整理しながら…(中略)…ちょっと離れた感じで、ものごとの成り行きを見極めながら、やるべき事の順番とかを忘れないようにしないと。(Cさん)

《成功経験や自分の強みを織り込む》とは、過去に同じような状況において成功した

と考えている実践を振り返り、「なぜあのときうまくいったのか」と過去のパフォーマンスとその要因をきちんと理解し、自分の強みとしているかかわり方を抽出し、それを今ある同様の状況に落とし込み、直面している状況をよい方向に向かうよう働きかけている状態である。これは、〈成功経験を今に活かす〉〈自分の強みを活かす〉の二つの概念から生成された。本調査の対象者は、これまで積み重ねてきた自分の成功経験を振り返ることで、「あの時、自分は何をどのように考えていたのか」を整理し、自分自身の強みと得意なことを「意図的に」思い出しながら、状況に合わせてそれを自らの実践に応用していた。

以前のうまくできた経験は、こういう時にはこれが大事というような形で自分なりのノウハウになります。でも、今のとは全く同じじゃないんで、どうしてうまくいったかというよりは、何をどう考えていたのかというのが、役に立ちますね。「こう考えればうまくいく」的な…。(Bさん)

3-2 (c) 『実践に取り組む姿勢の変容』

① 【自信とやりがいの表れ】

【自信とやりがいの表れ】とは、『行き詰まりの自覚』に至っていた新人ソーシャルワーカーが、その状況と向き合い、自分自身の行動や考え方を柔軟に変容させながら、状況の変化を試みるなかで得られた自信とやりがい感が、専門的な知識に対する深い理解と自らを取り巻く状況への解決力を高めていると認識している状態である。これは、『理解が深まる』『自律した判断を下す』『適切さを見いだす』『有能さに気づく』『信念を自覚する』の五つのサブカテゴリーから生成された。

『理解が深まる』とは、さまざまな難局を乗り越える中で、慣れ親しんできたやり方だけではなく、他者の豊富な経験をうまく自分の中に取り込むことでつくられた自分自身の行動や考え方の柔軟さが、業務のやり方や成果を高め、状況への理解力を深めると認識している状態である。これは〈実践に対する理解が深まる〉〈知識と実践が結びつく〉の二つの概念で構成された。本調査の対象者は、常に流動的である現場において、状況を具体的に把握したうえで、専門職としての自信の源である知識を行動化し、より良い方向に向かわせるためのやり方を積極的に取り入れるなかで、知識を獲得しながら実践していくことが重要であることに気づいていた。

その時は「よくわかった」と思ってたんですが、後で考えると、表面的というか浅くしか理解していなかったことがありました。まあ、わかった気がしていただけで、本当の理解にはなってなかったんだなと思います。(Dさん)

相談員という仕事は、日々学ぶ姿勢が必要なんだと感じました。最新の情報や知識を吸収して利用者さんのためになるように行動していくことです。学ぶことをやめて、実践だけを頑張っても独りよがりになりやすいし、逆に知識だけを吸収しただけで、毎日の実践でそれが出てこなくてはその努力は水の泡になるというか…。(Aさん)

《自律した判断を下す》とは、ソーシャルワーカーが日ごろの実践において、「目の前の担当業務で何を課題とし、どんな目標を立てるか」「自分は仕事で何を成したいのか」「どういう人になりたいのか」がイメージでき、その手段やプロセスを考え出し、実行すべき方向性を判断している状態である。これは〈客観的な視点を持つ〉〈自ら問題を見つけ出す〉〈自分の軸を持つ〉の三つの概念で構成された。混沌とした状況に翻弄され解決の糸口を見いだしてなかった本調査の対象者は、自らが自覚した問題状況とそれに対応するための自分の行動への振り返りを通して、客観的にみる視野と心のゆとりを得たことで、「自分は何者で、何をしていきたいのか」を意識するようになり、それに適した行動を自らの意志で選択し、自分の成長につながる軸を打ち出していた。

できれば、余計なことはせずに、自分は今まで通りでやりたいと、という考えが強かったんです。上司も「何はともあれ、いわれた事をしっかりと動いてくれればよい」という思いが強いタイプだったんで…。でも、いつものやり方で繰り返すのをいつまでも放置してしまえば、なんの見込みもなく…。(中略)「今まで通り」が通用しないことだっていっぱいだし、自分のためにはならないことに気づいたんですね。(Bさん)

いろんな人の話を聞いたり仕事の様子を見てると、唯一の正解があるわけではないし、自分から積極的にやったことの結果は、成功しても失敗しても自分自身の血となり肉となるんだなと思いました。(Cさん)

以前はいろいろと周囲に意見されると、そのたびに「どうしよう」と迷い、やった後でも「これでよかったのだろうか」とくよくよすることが多くあったんです。それで、やりがいもなくなり、心も離れて、失敗が多くなるような気がしてましたね。しっかりと自分の頭で考えて、何が問題なのかを見つけ出さないとね。失敗するとか不安とかを気にせずに、自分自身が覚悟ある行動を取ることが大事と感じました。(Dさん)

《適切さを見いだす》とは、自分の意志や目的を持って行ったかかわりによる状況の変化を実感することで、行為に対する意味の理解と妥当性を確保している状態である。これは〈手ごたえを感じる〉〈仲間から認められる〉〈信頼の深まり〉の三つの概念で構成された。日々の経験を積み重ねながら、その中で直面した問題状況を何とかしようと、それに向き合って取り組んでいた本調査の対象者は、仲間と一緒に働くことで、考え方やものの見方を変え、自分ひとりでは得ることのできなかった新しい価値観に気づいていた。

壁にぶつかって、それを乗り越えようと、何とかやれそうな方法を考えるうちに、仕事に対する面白みというかそんなもんが大きくなったと思うんです。それに先輩らの仕事のやり方や姿勢を注意して見ていたし、そのうちに自分だったらこうすると考えるようになったと思います。緊張したり不安に思ったことも、あのようによればこうなるだろうという見通しを持てるようになった気がします。(Aさん)

目の前の状況をどう理解するか、どう考えればいいのかを悩みながら、何度も確認をしてミスがないようにやっていたので、上司から「こういうところすごくいいね、頑張っているね」と褒めてもらったのは、自分がやってきたことが間違っていないことを評価して頂けたことなんで、何より嬉しかったんです。ある日、先輩から「最初は、あの子大丈夫かな？」と思ったけど「今はもう君に任せて大丈夫」に変わったね！と言われて…(中略)それまでの苦労が吹き飛ぶ感じでした。(Cさん)

些細なことでもおろそかにしないで、自分自身が納得できるところまでやっていたら、「もう大丈夫、ここまでできるんだ」と納得できて、自分に対して自信をもって、堂々と仕事ができるようになった気がします。(中略)ある時は、自分から仲間の仕事をもらったり、「こんなやり方はどうでしょう」と新しいやり方を提案したりするんですけど…。(中略)手助けをした仲間から「ありがとう」と言われて、素直に嬉しかったんです。(Dさん)

《有能さに気づく》とは、これまでの実践課程の中でさまざまな困難に直面しながらも、他者による助言や自発的な振り返りによって、自分自身の有能さに気づき、自信を持って実践を発展させている状態である。これは〈効力感〉〈自信の深まり〉〈実践の発展〉の三つの概念から構成された。〈効力感〉とは、「自分はできるんだ」という小さな成功体験を繰り返すなかで、ある状況に必要な要素を自分自身が上手く取り込んでいると自覚している状態である。〈自信の深まり〉は、何かの課題に直面した時に、「こうすればうまくいくはずだ」と考えた行動を「遂行できる」と思える自信を深めている状態である。〈実践の発展〉は、これまでの知識や過去の経験に基づき、特定の実践を行う際、期待する結果に結びつくと思う行動を自主的に引き出すことで、創意工夫できることである。

何かをやり遂げたことで「できた!」「やれた!」というか、うまくいったという経験の積み重ねがあると、人に振り回されたり、傷つけられたりしなくても、うまくやれるという気がするんで、自分の行動をとれるようになったと思います。(Aさん)

厳しい状況でもそれを乗り越えたというか、うまく対処できたことで、「自分にもできそうだと思う」ことが増えてきて、次は「あれも自分でやってみよう」「チャレンジしてみよう」という気持ちになって…。(Bさん)

先輩から指示されたこととか、見せられたことをただそのまま実行に移して行って、あまりその先のことを考えていなかったんですが…。(中略)今は、その逆ですね、考えて行動するというか、指示されたこととか見せられたことの「先」や「背景」にある思いをめぐらせると…(中略)この仕事の面白みというか…。(Dさん)

《信念を自覚する》とは、行き詰まり感を抱えていた新人ソーシャルワーカーが、それ乗り越えようと試みたこれまでの行動の積み重ねによって、業務に対する理解と基本的な姿勢を肯定的に捉えるようになり、対人援助の普遍的な価値に対する動機づけを見いだしている状態である。これは〈積み重なったこつ〉〈実践に対する基本的な構え〉〈専門職としての意識の芽生え〉の三つの概念から構成された。

〈積み重なったこつ〉は、一瞬一瞬の選択を積み重ねながら、適切な視点を持ち、状況に応じて実践してきたことが、今の状況判断を行う際の拠り所となっていると認識していることである。〈実践に対する基本的な構え〉は、これまでの自らの行為をとおして、自分の実践に対する理解を深め、基本的な姿勢を自覚している状態である。さらに、〈専門職としての意識の芽生え〉は、これまでの経験を通して体得した様々な視点を対人援助の普遍的な価値に関連づけ、自らの役割を意識するようになったことで、援助専門職としての動機づけを高めている状態である。

なんか仕事をやりながら「ひょっとして!?!」「やっぱり!」という形で、ポンというひらめきとかを、見過ごしたり、忘れてしまったりしないで、それを次の仕事に活かそうと…(中略)すると、なんかすごい使えるコツって感じたりします、専門的な。こうした気づきが専門的な仕事ができるコツにつながっていると思います。そういうコツがないとやっぱ(援助とか)できないことなんで。(Bさん)

身につけたいろんな見方を、違うところに持ち込んだりして、深く理解するっていうのは、対人援助の仕事では当たり前なんですけど、でも、それを意識的に見出そうとしない限り実感しにくいと思うんです。(Cさん)

忙しかったり人手が足りない時は、入居者の希望であっても「安全優先」で尊重できなかったり、時間的な制約のためにゆっくり話すことができなかったりするんです。けれど、まず相手の立場に立って「自分がこうしてもらえたら嬉しいだろうな」とか、「ああこれは自分は嫌だな」ということをちゃんと考えて(援助)することが必要なんだと思うんです。入居者との関係性を深めていくことは、とても大事なんで。(Dさん)

4. 考 察

4-1. 新人ソーシャルワーカーの困難を乗り越える過程における省察の特徴

新人ソーシャルワーカーは、自らの実践において行き詰まりや困難に気づくと、自分よりも多くの経験を持つ先輩の実践や語りを手がかりとする【他者の経験を媒介としたアプローチ】を駆使して、その状況の判断や対処を行っていた。あるいは、【他者の経験を媒介としたアプローチ】を駆使して、そこでの省察の積み重ねを通して持ち得た知識を手がかりとする【自己の経験を媒介としたアプローチ】を通して、困難を乗り越えるための状況の判断や対処を行っていた。言い換えれば、新人ソーシャルワーカーは、実践の中での振り返りによって、他者の有する経験から導き出した判断や対処法を、自らが直面している“今ここでの状況”に持ち込み、かかわるなかで、困難そのものの意味を見直し、そこから得られた知識や能力を自分のものにしていく。この過程で、新人ソーシャルワーカーは、他者の持っている知識や技能を受動的に受け入れるのではなく、自己の視点から主体的に意味づけ、行動として具体化していた。彼らは自らの実践活動の中で、「先輩の実践や経験の語り」という手がかりに導かれ、実践に関する知識や対処行為を「こうすれば上手くいくかもしれない、こうやってみてはどうだろうか」と関連づけ、さらに自分自身の実践の中に落とし込むことで、その理解を深めていき、『問題状況の捉え方の変容』と『実践に取り組む姿勢の変容』を導き出していた。これらの結果から、新人ソーシャルワーカーが困難な経験を乗り越える過程で行う省察が、新たな自分を発見し、実感的な自信につながるプロセスとして働きかけていることが示唆された。そして、それまでの他者の持つ過去の経験は、新人ソーシャルワーカーの能動的な働きかけによって変容していき、彼らの実践の中に位置づけられたことで、新たな意味合いを持ったものとして更新されていた。このような新人ソーシャルワーカーの能動的な働きかけとその結果の関連付けにおいて、ジョン・デューイ（2000:108）は「なんらかの思考の要素がなければ、意味をもつ経験は可能ではない」と述べている。つまり、自己にかかわる経験であっても、意図的な関連づけがなされない限り、それは意味のない経験に過ぎないということになる。そして、この「意図的な関連づけ」が、自己の経験としっかり向き合い、深く洞察し、他者と共に思考を掘り下げ、検討することによって、自分自身の考え方が変化し、自らの成長につながることを認識する必要がある。

省察を、新人ソーシャルワーカーが行う実践能力の一つとして捉える場合、その能力は、他者とのかかわりの中で、その実践を見たり経験の語りを聞いたりすることを通して、実践に関する知識や対処行動を主体的に意味づけていることが明らかになった。本

研究の対象者は、「どのような状況で、どのような知識を用いて、どう動けば、よいのか」を自分なりに解釈し、価値づけ、それを個別の具体的な状況において実行していた。これを通して、新人ソーシャルワーカーは、自己の実践力の磨きと同時に実践態度についての理解を深めることで、援助専門職としての成長ともいえるべき【自信とやりがいの表れ】を獲得していた。これは、実践において直面する経験が、自分自身の中に定着するためには、実践中に起こったさまざまな経験への省察を積み重ねながら、それらを明確化、すなわち自分が経験した中で起こった事柄が自分にとって何だったのかを考え、自分なりに見極めようと試行錯誤を繰り返すことによって導き出されたものであった。

このような省察の過程は、新人ソーシャルワーカーの内面的変化に至る過程であり、それによって意識的に生成された知は、新たな状況に対する自己の行動様式として再構築され、より洗練された経験へと変容していた。

4-2. 省察を促す方法としての「対話」

新人ソーシャルワーカーは、自らの実践に対する省察を繰り返すことを通して、異なる視点からの新しい意味を見だし、自らを苦しめている経験と統合させることによって、困難に立ち向かう新たな行動パターンを生み出していた。すると、新人ソーシャルワーカーが困難を乗り越える過程で見せている省察は、その困難な経験を通して成長するために欠かせない重要な役割を果たしていると考えられることができる。

一般に、援助専門職は、日常的に省察を意識することが求められているが、まだその習慣化ができていない新人ソーシャルワーカーの場合、一人で実践しながらの省察となると、中途半端に終わってしまったり、行き詰まることもある。そのため、敢えて立ち止まる機会を設け、意図的に自己への気づきを促し、自己の思考や行動を振り返り、「語る」ことが有効であると考えられる。

本調査の対象者は、自らの経験について「語る」ことで、その時間を生きた自分を他者にも自分にも見えるようにし、あるいは再現ビデオを見るかのように、もう一度一緒に経験していた。そのような経験の共有によって、自分と他者との違いやズレを認識していた。また、他者の語りを「第三者」の姿勢で聴き、問いかけ、問いかけられることで《適切さを見いだす》視点を得ていた。様々な経験を語り合う中で、まだ経験する場面が少なくても、失敗したり納得できない経験から自分の実践に不足していたことに気づき、【他者の経験を媒介としたアプローチ】と【自己の経験を媒介としたアプローチ】を駆使し、【自信とやりがいの表れ】につなげていた。

なかでも、〈先輩の実践を見聞きする〉〈先輩同士の会話から、情報を得る〉〈物語られた先輩の見識を取り入れる〉という概念に示される「対話」は、他者を意識し相互の

視点を借りあうことで、「気持ちを整理する」ことや「悩みや疑問を共有し学び合える」ことを促し、自己と他者を見つめ直す学びが促進されていたと考えられる。つまり、新人ソーシャルワーカーは、他者との話し合いによって、自己の思考を整理することができ、理解を深めていたのである。同時に、他者と「対話する」ことで日々の実践について悩んでいるのは自分だけではないことに気づき、精神的な負担が軽減していると感じていたと考えられる。これらのことから、新人ソーシャルワーカーが「他者との対話」を通して行う省察は、自己の実践の価値に気づき、実践を前向きに捉えていくことを示唆するものである。

すなわち、新人ソーシャルワーカーは、様々な困難に向き合っている「いま、ここ」という時の中で、他者とのかかわりと「対話」を通して、自らの経験を改変するに至る新たな「知識」や「態度」、「実践への対応様式」といったものを、主体的に獲得し、その結果、ソーシャルワーカーとしての自分を認めることができ、実践へのやりがいを獲得していた。

5. 結 論

新人ソーシャルワーカーは、自らの実践において行き詰まりや困難に気づくと、自分よりも多くの経験を持つ【他者の経験を媒介としたアプローチ】と【自己の経験を媒介としたアプローチ】を駆使して、実践の中での振り返りを行い、それによって意識的に生成された知を自らが直面している“今ここでの状況”に持ち込むことで、『問題状況の捉え方の変容』と『実践に取り組む姿勢の変容』を導き出していた。この過程で、彼らは、他者の持つ知識や技能を自己の視点から主体的に意味づけ、行動化していた。それによって生成された知は、自己の実践力の磨きと実践態度についての理解を深め、援助専門職としての【自信とやりがいの表れ】を生み出していた。このように、他者の有する経験から導き出した判断や対処を、自分が直面している状況に意図的に関連づけ、困難を乗り越えていく過程は、新人ソーシャルワーカーの内面的変化に至る過程であり、それによって意識的に生成された知は、新たな状況に対する自己の行動様式として再構築され、より洗練された実践へと移行していることが示唆された。

最後に、本研究の限界と課題について言及しておく。本研究で明らかになった結果は、特養の新人ソーシャルワーカー4名の語りに基づくものであるため、すべてのソーシャルワーカーに一般化できるものではない。また、長期にわたるインタビューによるデータの収集であったため、インタビュー内容と関連した意識的な動機づけが、調査対象者の実際の業務に影響していたことも考えられるため、抽出された分析結果の説明力には、限界がある。そのため、今後この結果を一般化するためには、対象者を拡大した

調査を継続していくことが必要である。

謝辞

本研究にあたり、心に閉まってあった思いも含めて、貴重な経験を十分に語ってくださった研究対象者の皆様に深く感謝申し上げます。また、研究協力ならびにご支援いただきました管理者をはじめ他の職員の方にも厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 土居健郎 (1977) 『新訂 方法としての面接』 医学書院。
- 福田俊子 (2015) 「ソーシャルワーカーの基盤を形成する臨床体験の構造第1報－自己生成プロセスにおける「節目」の臨床体験がもつ意味－」 『聖隷社会福祉研究』 7: 14-32。
- 日和恭世 (2013) 「ソーシャルワーカーの思考に焦点を当てる意味－反省的実践家の視点から－」 『別府大学紀要』 (54): 105-114。
- 日和恭世 (2015) 「ソーシャルワークにおける reflection (省察) の概念に関する一考察」 『別府大学紀要』 (56): 87-97。
- 保正友子 (2005) 「ソーシャルワーカーの専門的力についての予備的調査」 『社会福祉実践理論研究』 14: 27-40。
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践質的研究への誘い』 弘文堂。
- 空閑浩人 (2012) 『ソーシャルワーカー論－「かかわり続ける専門職」のアイデンティティ－』 ミネルヴァ書房。
- 久我直人 (2008) 「教師の専門性における『反省的実践家モデル』論に関する考察 (2)－教師の授業に関する思考過程の分析と教師教育のあり方に関する検討－」 『鳴門教育大学研究紀要』 23: 87-100。
- 南彩子 (2007) 「ソーシャルワークにおける省察および省察学習について」 『天理大学社会福祉学研究室紀要』 (9): 3~16。
- 齋藤征人 (2010) 「社会福祉士の『実践知』形成過程に関する仮説的研究」 『帯広大谷短期大学紀要』 47: 31-44。
- 齋藤征人 (2011) 「高齢者福祉実践者の『実践知』形成過程に関する仮説的研究」 『帯広大谷短期大学紀要』 48: 55-68。
- 坂本智代枝 (2009) 「精神保健福祉士がピアサポーターを支援することを通して成長するプロセスに関する研究」 高知女子大学博士学位論文
- Schön, D. A. (1983) 『The Reflective Practitioner』 Basic Books。(=佐藤学・秋田喜代美訳 (2001) 『専門家の知恵－反省的実践家は行為しながら考える－』 ゆみる出版/=柳沢昌一・三輪健二訳 (2007) 『省察的実践とは何か－プロフェッショナルの行為と思考－』 鳳書房。
- Schön, D. A. (1987) 『Educating the reflective practitioner』 San Francisco Jossey-Bass。
- 須藤八千代・福田俊子・村田明子・吉川公章 (2009) 「ソーシャルワーカーの成長と発達」 『社会福祉研究』 愛知県立大学教育福祉学部: 23-31。
- 高木健志 (2011) 「質的データを用いたソーシャルワークに関する一考察 (その1)」 『山口県立大学学術情報』 (4): 67-77。
- 高橋幸三郎 (2002) 「ソーシャルワーカーの専門職的自己形成過程に関する事例的考察－自己形成を促進させる要因の探索的分析を中心に－」 『東京家政学院大学紀要』 42: 53-62。
- 横山登志子 (2006) 「現場での『経験』を通じたソーシャルワーカーの主體的再構成プロセス」 『社会福祉学』 47(3): 29-42。
- 吉川公章・福田俊子・村田明子・須藤八千代 (2007) 「ソーシャルワーカーの成長に関する研究の方向性と課題」 『聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要』 5: 1-15。

注

- (1) Schön の著書の訳者である柳沢ら (1983 : V) は、「reflection」の訳語として「自分の過去の行為について批判的な考察を加えることを意味する『反省』では、過去への指向と批判性が強く出てしまいかねないこと、過去を振り返りみるという意味の『ふり返り』には、批判的なニュアンスは減退するものの、過去への指向性が残ること、また、深く自分をかえりみることを意味する『内省』では、自分の内面を見つめることのみが重視される可能性がある」として、「省察」という訳語を採用している。本稿も、これに基づき「省察」という訳語で表記する。

Creation and Transformation of Coping Behaviors in
New Face Social Workers Who Overcome Difficulties :
Through Longitudinal Analysis Focusing on the “Reflection”

Heesook Son and Yasuhiro Kuroki

In this study, through a longitudinal interview with four new face social workers, we worked to clarify the creation and transformation of coping behaviors in new face social workers overcoming difficulties. While facing difficulties, the new social workers reviewed their previous use of “approaches to difficulties relying on the experience of others” who had more overall experience than themselves and “approaches to difficulties relying on personal experience”; the knowledge that they gained from this action helped them in facing the current situation. Further, by taking appropriate action, they could derive a transformation in their coping behaviors with respect to understanding a problem situation and in their attitudes toward adopting a practical approach” were derived. This created a feeling of “confidence and self-efficacy” which improved practical skills and deepened the understanding of practical attitudes.

Key words : New face social worker, Difficulties, Overcoming, Reflection, Professional Growth